

【研究論文】

ロベール・シャルボノーと
フランス・レジスタンス派との論争を巡って

Autour de la controverse entre Robert Charbonneau et des écrivains de la Résistance

立花英裕

TACHIBANA Hidehiro

Résumé

Juste après la Seconde Guerre mondiale, des écrivains français, réunis principalement autour des *Lettres françaises*, comme Louis Aragon et Jean Cassou demandent aux éditeurs montréalais de cesser de publier des auteurs collaborateurs, bannis en France, tel Charles Maurras. C'est Robert Charbonneau, écrivain et cofondateur des Éditions de l'Arbre qui riposta à cette attaque. Le présent travail tente d'examiner et analyser cette polémique. Qu'entendait Charbonneau par « la personnalité canadienne » ou « la signification américaine »? Ces interrogations nous amènent à découvrir, en nous appuyant sur le travail de Gilles Marcotte, les pensées différentielles et relationnelles de notre polémiste. Celui-ci ne prône ni régionalisme ni retour aux traditions. Pour lui, « la personnalité canadienne » est relationnelle du fait qu'elle ne peut échapper ni aux influences françaises ni à celles des continents américains; mais elle peut s'assurer l'autonomie au moyen de ses propres choix. Cette mise en rapport différentiel des Canadiens français prépare l'aventure de la génération de l'Hexagone. D'un autre côté, il faudrait souligner que cette revendication d'autonomie culturelle et littéraire ait trouvé de ses premières formes au moment de l'éclipse de la République française, consécutive à l'occupation allemande. Une autre perspective est ainsi introduite dans notre analyse selon laquelle cette éclipse momentanée de « la République des lettres » française, cause de la segmentation des espaces francophones, aurait contribué à l'autonomie et/ou la naissance même de littératures de langue française. Dans ce sens, les activités littéraire et éditoriale de Charbonneau pourraient se comparer à celles

d’Aimé Césaire, qui proposait à la Martinique sous le régime de l’amiral Robert une nouvelle vision du monde avec la revue *Tropiques*, et cela même si la conception littéraire de ces deux auteurs est fort différente.

キーワード：自律性、ケベックナショナリズム、第2次世界大戦、ルイ・アラゴン、フランス系カナダ文学

Mots-clés : autonomie, nationalisme québécois, la deuxième guerre mondiale, Louis Aragon, littérature canadienne-française

はじめに—ロベール・シャルボノー『フランスと私たち』

1946年3月8日、『レ・レットル・フランセーズ』に、モンレアルの出版界を非難する匿名記事が掲載される。モンレアルで対独協力派の作家たちがなおも出版されているのはけしからんというのである。筆者はルイ・アラゴンと言われている。このフランス・レジスタンス派からの抗議に対して、モンレアルの出版界は目立った反応を示さなかった。シャルル・モーラスなど対独協力派の著作が出版されていたのは事実であり、フランスでの対独協力派粛清は遠い出来事だった。しかし、1人だけ真正面から反論を試みた作家がいた。ロベール・シャルボノー（Robert Charbonneau）である。彼は小説家だが、独自の路線を貫く出版社アルブル社(Les Éditions de l’Arbre)の共同経営者でもあった。

シャルボノーの反論の骨子は、次のようなものである。たしかに対独協力派の出版物が見受けられないこともないが、カナダのフランス語系出版界は自由フランス側を支援してもきたし、フランスに隷属しているわけではない、というのである。シャルボノーは、モンレアルの出版界を擁護するにとどまらず、いわば自陣営のフランス語系作家たちに覚醒を促す次元も含んだ議論を展開する。

論争は少なからぬ文学者、知識人を巻き込み、1948年まで続いた後、あいまいに立ち消えになる。シャルボノーは、論争の経緯をまとめた小冊子『フランスと私たち』を1947年に出版している。論争はその後長い間忘れられていたが、1980年代後半になってカナダ・フランス・アカデミーの機関誌『フランス系カナダのテキスト (Écrits du Canada français)』がシャルボノー特集号を企画（1986年）、エリザベト・ナルドゥ＝ラファルジュ (Élisabeth Nardout-Lafarge) がマギル大学に博士論文『ケベックの文学〈界〉

とフランス－1940年－1950年』(1987年)を提出した頃から再評価されるようになった。ナルドゥ＝ラファルジュは、1993年にシャルボノーの『フランスと私たち』に詳しい解説を付して再版している。本論文では、この論争を紹介するとともに、それがもった意義を考察してみたい。

1. 『ラ・ルレーヴ』の創刊者ロベール・シャルボノー

ロベール・シャルボノーは、カナディアン・パシフィックの鉄道員を父として、1911年にモンリアルに生れている。コレージュ(Collège Sainte-Marie)時代の友人たちがたいい裕福な家庭の出身だった中で彼の出身の慎ましさが目立つと指摘する評者もいる。親友で、外交官になったポール・ボーリュエ(Paul Beaulieu)によれば、シャルボノーは体格が頑強、神経質で緊張した物腰の若者だった。依怙地で断定的な物言いをする完璧主義者である一方、傷つきやすく、人を避けるような面もあったという(Beaulieu, 1987, p.7)。モンリアル大学社会政治学部(école de sciences sociales et politiques)に進学、ジャーナリズムの学士号を取得している。卒業後、『祖国(*La Patrie*)』紙の記者になり(1934年-1937年)、1941年に小説『彼らは土地を手に入れるだろう(*Ils posséderont la terre*)』でダビッド賞を受賞している。その他、評論集『人物を知ること(*Connaissance du personnage*)』(1944年)、小説『フォンティル(*Fontile*)』(1946年)がある。

彼が今日記憶に残っているのは、なによりも雑誌『ラ・ルレーヴ(*La Relève*)』によってだろう。コレージュ時代の友人、前出のポール・ボーリュエやクロード・ユルテュビーズ(Claude Hurtubise)、ロジェ・デュアメル(Roger Duhamel)、ロベール・エリー(Robert Élie)、アンドレ・ロランドー(André Laurendeau)、ジャン・ル・モアヌ(Jean Le Moyne)、エクトル・サン＝ドニ・ガルノー(Hector Saint-Denys Garneau)らと共に、1934年に哲学生芸雑誌『ラ・ルレーヴ』を創刊する。同人の中で特筆すべきなのは、いうまでもなくサン＝ドニ・ガルノーである。フランス語系カナダ文学において自由詩の領域を拓いたこの詩人は、喘息に苦しみ、31歳で亡くなったため、僅かな数の詩作品しか残さなかったが、戦後詩に及ぼした影響は計り知れない(ワテヌ、2013 pp. 103-104)。彼らは「『ラ・ルレーヴ』の世代」と呼ばれている。『ラ・ルレーヴ』誌は、戦争中に『ラ・ヌーヴェル・ルレーヴ(*La Nouvelle Relève*)』(1941年)になるが、マルセル・ブルースト、ジッド、バタイユやレリスなど、当時、あまり読まれていなかったフランスの作家・

思想家を広く紹介している。

前述のアルブル社は、1940年、シャルボノーがユルテュビーズと共同で設立した出版社だが、アンヌ・エペール、イヴ・テリオ、ロジェ・ルムランなどを世に送り込んだことで知られる。しかし、不運にもアルブル社は1948年に倒産する。シャルボノーは失意の中でラジオ・カナダに入社し、その後は、創作活動も停滞し、1967年に亡くなっている。

一見したところ、論争は単純にも見える。ようするにモンレアルの出版界が戦後の世界秩序を尊重して、対独協力派作家の出版を止めればいいのである。モンレアルの出版界の曖昧な姿勢は擁護しがたいように見える。しかし、シャルボノーにしてみれば、フランス側の態度はあまりに一方的だった。しかも、アルブル社の存続もかかっていた。この点を説明するには、迂回して第2次世界大戦中の特殊な出版事情に触れなくてはならない。

2. 大西洋を横断するモンレアルの出版界

ことは、カナダ政府が1939年9月10日に対独戦争を布告した後に、敵国とみなされる地域で出版された著作の出版を、著作権者の承諾をえずに刊行できるとする政令を出したことに始まる。この時点でフランスはカナダの敵国ではなかったが、1940年6月からパリはドイツの占領下に入り、この法的措置が適用される。それを機に、モンレアルの出版社はこぞってフランスの書籍を再版する。降って湧いたような出版ブームが訪れた。

もちろん、モンレアルだけではない。共和国フランスの崩壊によって、フランス語の書籍出版はニューヨークや南米の諸都市でもなされる。この事態は、ド・ゴール將軍側について亡命作家たちにとっても悪いことではなかった。モンレアルは、アメリカ大陸の諸都市と共に、フランスで出版できない作家たちを迎え入れたのである¹。

こうした出版社の中で最も成功したのが、ポール・ペラドー (Paul Péladeau) が設立したヴァリエテ社 (Éditions Variétés) だった。同出版社は、ジョルジュ・デュアメルの全小説、ロジェ・マルタン＝デュ・ガール『チボー家の人々』、マルセル・プルスト『失われた時を求めて』など、両大戦間の大河小説を数多く再版している。対独協力派も出版したが、ルイ・アラゴンの詩集『断腸 (*Le Crève-cœur*)』(1943年。初版ガリマール社) や、フィリップ・バレス (Philippe Barrès) 『シャルル・ド・ゴール』(1941年) も出している (Michon, 2009)。

アルブル社については後で触れるとして、他には、レジスタンス派（ポール・エリュアール、ピエール・エマニュエル、ヴェルコール）やフランス系カナダの詩人（アラン・グランボワ Alain Grandbois）を出すリュシアン・パリゾー社（Éditions Lucien Parizeau）。ジョルジュ・シムノンのような大衆性のある文学や『ボヴァリー夫人』のような古典を出す B.D.サンソン社（B.D.Simpson）。同じく古典を出し郷土文学も手がけるフェルナン・ピロン社（Éditions Fernand Pilon）などがあった。

このような出版社群を、ケベックの出版史を研究しているジャック・ミシヨンは「大西洋横断出版社（Éditeurs transatlantiques）」と呼び、その特徴を次のように規定している。

〔大西洋横断出版社とは〕第2次世界大戦の時期に、ヨーロッパの著者、亡命中の作家、カナダの作家の著作を、複数の大陸に向けて出版・流通させたモンレアルの出版社のことである。これらの出版社の活動と出版物は、当該地の公衆に向けられていたが、しかし同様に、ロンドン、ニューヨーク、アルジェ、ブエノスアイレス、メキシコの読者にも向けられ、今日のケベックが現代世界に門戸を開くにあたって先駆的役割を果たしたのである。（Michon, 1991, p.9）

出版の拡張は、地元の文学にも好影響をもたらした。カナダのフランス語話者人口は限られ、フランス語文学の捌け口は大きくない。しかし、このブームのお蔭で出版社に経済的余裕が生じ、はるかに出版がたやすくなったのである。フランスの著名作家を扱う出版社から出ることで、フランス語系カナダの著者が注目され易くなったこともある。この事情を、ロベール・シャルボノーは、次のように説明している。

フランス語カナダ文学は、幾つかのめざましい例外があるにしても、1920年頃までは郷土文学（*littérature de terroir*）だった。その存在を正当化してくれるのは、その政治的、社会的、歴史的目的であって、あらゆる芸術が目指す高い完成度は二の次だった。このことは容易に説明がつく。

（中略）1919年以前、政治的には、カナダは国際舞台でなんの役割も演じていなかった。我々が第1次世界大戦に参加したことで、より大きな自律性もたらされた。そして、1939年に、英国や合衆国の側に付いて第1線の役割を演じてほしいとの呼びかけを受けたのである。したがって、我々の文学が

外国人の目に存在するようになりはじめたのは、ごく最近 10 年くらいなのだ。カナダの作家は、彼に注がれる視線に応じて努力をする気持ちになった。(Charbonneau, 1993, pp.41-42)

事実、アルブル社の刊行物を見ると、フランス系カナダの著作は、創立時の 1941 年が 1 点、1942 年と 43 年が各々 9 点、1944 年と 1945 年が各々 16 点となっている。1946 年以降は減少し、1948 年までに、8 点、3 点、5 点と推移している。アルブル社が存続した約 8 年間における出版総数は 160 点だが、その内の 67 点がフランス系カナダの著作だった (Michon, 1991, p.35. 注 4)。また、出版総数 160 点について言えば、創立年の出版数が 10 点だったのだから (Michon, 1991, p.16)、戦時中にいかに飛躍したかが分かる。

3. アルブル社のカトリック左派路線とフランス系カナダの文化状況

アルブル社は、「大西洋横断出版社」群の中でもとりわけ異色な存在だった。まず、フランス文学の再版よりも新刊中心だったことが挙げられる (Michon, 1991, p.28)。アンヌ・エペール (*Les Songes en équilibre*, 1942) やイヴ・テリオ (*Contes pour un homme seul*, 1944) を世に送り出した功績はここでは置くとして、フランスのカトリック左派系の出版に力を入れ、ド・ゴール派と連携したのである。アルブル社には「ジャック・マリタン (Jacques Maritain) に近い進歩主義のカトリック、自由フランス防衛のために集まった社会主義者や自由思想家、そして若いケベックの作家たち」がいたのである (Michon, 1991, p.9)。

アルブル社は当初からカトリック左派と結びついていた。そもそも、出版第 1 号がジャック・マリタン『文明の黄昏 (*Crépuscule de la civilisation*)』だった。この書は、1939 年に著者がパリで行った講演を基にしたもので、わずか 93 頁しかなかったが、3 週間で 3000 部が捌けた。終戦までには 5 万部にも達している。これは、フランス語話者の人口からすると、大変なベストセラーだった (Michon, 1991, p.34)。シャルボノーは、この成功を受けて「時事問題 (*Problèmes actuels*)」叢書を創設、後付けだが、『文明の黄昏』を叢書の 1 冊目とした。叢書は国際的にも知られるようになり、ブラジルに亡命していたベルナノスの『イギリス人への手紙 (*Lettre aux Anglais*)』が、リオデジャネイロのアトランティカ・エディドラとの共同出版の形で出版される²。中には、地下ルートを通してフランスから届けられ、出版された作

品もある。ピエール・リマーニュの『フランスの現状に関する、アクション・カトリック指導者の証言』で、ジャック・マリタンの序文がつけられた（[Pierre Limagne] *Témoignage sur la situation actuelle en France par un dirigeant français d'action catholique*. 1941）（Michon, 1991, p.210）。

ロベール・シャルボノーは、1934年にジャック・マリタンに出会い、そのキリスト教的ヒューマニズムに感化されていた（Amyot, 1999, p.255）。ジャック・マリタン自身、複雑な思想的履歴をもち、シャルル・モーラスのアクション・フランセーズに接近したこともある反近代主義者だったが、新トマス主義の立場から民主主義やライシテとカトリック思想を融和させるに至った哲学者だった。シャルル・ド・ゴールがロンドンからラジオ放送で対独抗戦を訴えた1940年6月から自由フランス側に立ち、当時のシャルボノーの政治的選択に決定的な影響を与えたのである。

アルブル社にはもう1つの重要な叢書があった。自由フランスの戦略と直接に結びついた「フランス・フォーエヴァー（France forever）」である。この叢書は、ロックフェラー財団を介してモンレアル大学医学部の生理学教授に就任したアンリ・ロージェ（Henri Laugier）の提案によるもので、1942年に創設され、ロージェ自身が編集責任者になった（Michon, 1991, p.19）。

アンリ・ロージェは独仏休戦協定締結時に国立科学研究センター（CNRS）の所長を務め、且つ文部省の要職にあったが、亡命を決意し、モンレアルに来ていた。他方、アメリカ合衆国では、フランスの実業家ユージェヌ・ウードリ（Eugène Houdry）がフランス・フォーエヴァーという民主主義の理念を喧伝する協会を1940年8月に設立していた。ド・ゴール派についたロージェはこの協会に接近し、まもなく副会長になり、ウードリを会長として頂きながら実質的な指導権を握る。そして、新聞・ラジオその他のメディアを駆使して自由フランスの宣伝活動をする。その出版部門がアルブル社だった（Morelle, 1995, pp.6-12）。

叢書は、ロージェの専門分野も反映しているのだろう、医学、生理学関係の著作が多かったが、地理学、政治関係、証言なども含まれていた。ロージェ自身の評論集『亡命の戦い』（*Combat de l'exil*, 1944）、オーギュスト・ヴィアット『極東と我々』（*Auguste Viatte, L'Extrême-Orient et nous*, 1942）、アンドレ・マロゼッティ『ゲシュタポの牢獄から亡命へ』（*André Marosetti, Des prisons de la Gestapo à l'exil*, 1944）などがある（Michon, 1991, p.22）。

アルブル社は、この2つの叢書の他にも、反ヴィシー政権的な著作を刊行

している。レオン・ブルム『歴史は審判を下すだろう』（Léon Blum, *L'Histoire jugera*, 1943）、ポーリス・コルデー『私は占領下のパリを生きた』（Pauline Corday, *J'ai vécu dans Paris occupé*, 1943）などである。しかし、対独協力派に近い著作が全くなかったわけではない。ジェラルド・ド・カタローニュ『精神性の仲間たち』（Gérard de Catalogne, *Les Compagnons du spirituel*, 1945）は対話集だが、モーリアックやプレーストなどの他に、マシイ（Massis）やドリユ・ラ・ロシエルのような作家も登場しているのである。

アルブル社の出版活動は、戦況が連合軍に有利になるにつれて活況を呈していった。1944年の出版点数は、40点を越えている。連合軍が北アフリカに上陸したのである。アンリ・ロージェが1943年末にアルジェ大学の学長に任命されたことに伴い、アルブル社はアルジェ大学から合衆国を介し大量の注文を受けた。ユルテュビーズによれば、売り上げが倍増した。パリ解放後、ロージェがフランス外務省文化政策のトップに就任すると、今度はフランス政府からの注文が押し寄せた。1945年の出版点数は50点にも達している。だが、その後は急落だった。ロージェが外務省を辞め国連に赴任したため、フランス政府からの注文が途絶えたのである（Michon, 1991, pp.19-23）。更に悪いことに、フランスの出版社が失地回復の動きに出てきた。シャルボノーは、当初、フランスの出版界と協力・共存できると考えていたが、その期待は裏切られる。1944年にケベック州政府が、比較的進歩的だったアデアライド・ゴットブー政権からデュプレシ政権に移行していたことも不利に作用した。デュプレシ政権は文化政策に後ろ向きで、出版界に救済の手を差し伸べなかった。それどころか、対独協力派のフランス人を州内に受け入れ、1947年にマルセル・カルネの映画『天井桟敷の人々』を上映禁止にする措置をとった（Charbonneau, 1993, p.83）。フランスでケベック州が対独協力派の逃亡先になっているという評判が立ったのも当然である。

4. フランス・レジスタンス派との論争

このようにモンレアルの出版事情が暗転したときに、シャルボノーとフランス・レジスタンス派の論争が始まったのである。実は、フランスからの不満の表明は、冒頭に紹介したアラゴンの匿名記事よりも少し前から始まっていた。1946年1月1日付『フィガロ・リテレール』に、アカデミー・フランセーズ会員ジョルジュ・デュアメルがフランス系カナダを揶揄する記事を載

せていた。それに対して、エティエンヌ・ジルソン (Étienne Gilson) が同年1月6-7日付『ル・モンド』に反論を載せている。ジルソンはジャック・マリタンと親交があった、中世哲学の著名な学者である³。

デュアメルは、フランスを1本の樹木、フランス系カナダをその枝に譬えている。「[フランス系カナダという枝は] 現在厚い壁によって元の幹から切り離されているようだが、頑強な枝である。もっとも、枝ではある。そして、枝は樹木の榮譽になっている」。ジルソンは、このような尊大なデュアメルの記事に対して、どうして枝が切り離されたまま幹から養分を受けられるだろうか、フランス系カナダは枝であるどころか、立派な樹木なのだと反論している——「我々が [=フランスが] 樹木だとしたら、この樹木は自分の枝を気づかした試しがなかった。今になって気づかうのであれば、それは結構なことだ。ただし、あまりにも長い間、放置していたので、そこに見出すのはもはや枝ではない。1本の樹木だ。同じ種類の樹木ではある。だが、別の樹木だ」。ジルソンは、デュアメルに、フランス系カナダを従属視する態度を見抜いている。記事の末尾では、画家アルフレド・ペラン (Alfred Pellán) を引き合いに出し、すぐれた画家だが、絵を見れば、フランス絵画史に属さない画家であることは明白だとして、フランス系カナダがフランスの兄弟であるとしても、対等に扱わなければ両者の関係が危うくなるだろうと警告している (Écrits, 1986, pp.199-201)。

シャルボノーの方は、同年、『ラ・ヌーヴェル・ルレーヴ⁴』に「フランスの威光 (Le rayonnement de la France)」と題した記事を掲載、カナダに若い世代の優秀な文学者が続々と登場しているのに、内向きになったフランスが無関心なのは残念だと嘆く。更に3月には、「フランスの本」の中で、最近フランスから届く本の質が落ちたのはどうしたことか、無名作家の落書きのようなものばかりなのは、国内分裂に陥り、文壇が混乱しているせいではないかと毒舌を吐いている (Charbonneau, 1993, pp.36-37)。彼は、シュルレアリスムや社会主義リアリズムを評価しなかったのである。

1946年6月21日付『レ・レットル・フランセーズ』に掲載されたジャン・カソー (Jean Cassou) の記事「強情なモーラス主義者たち (Maurrassisme impénitent)」は、アラゴンの匿名記事よりも遥かに手厳しかった。文学と政治は別なのだからモーラスを出版してどこが悪いと言うのは、言語道断だと憤慨する⁵。カソーにとっては、「モーラスは政治的な敵でもなければ、哲学的な敵でもない。私の思想の敵対者ではないのだ。私の国の敵

なのだ。それに、私は彼に才能を認めたことは1度もない。本質的に錯乱であるものに才能を認めることはできない」と書く (*Écrits* 1986, p.211)。しかし、シャルボノーから見れば、「モーラス主義者」呼ばわりされるのは、フランス知識人の無知によるのだ。翌年になって、カスーは、より融和的な書簡 (1947年10月2日付) をシャルボノーに送っている。カスーはカナダについて自分が無知なのを認めた上で、理解を求める——「私は、フランス人の親独義勇兵に追われていたのです。彼らは多くの私の同士を殺害したのです」。カスーは投獄されたこともあれば、瀕死の重傷を負ったこともあるレジスタンスの闘士だった⁶。

しかし、シャルボノーの態度は揺るぎなかった。シャルボノーはモーラスを弁護したいのではなく、自分が戦争中モーラスとは正反対の立場にいたことを認めてもらえないことが悔しいのだ。当時、フランス文壇の頂点に立っていたアラゴンらの党派的な言動にも批判的だった。アラゴンにしてみれば、大事なのは戦後の文壇支配なのであって、彼の著作がヴァリエテ社から刊行されていたことなど些細なことなのだ。シャルボノーは嘆く。

残念なことに、アルブル社の名前に初めて言及した人たちは、どうでもよい作品について我々を非難し、ジャック・マリタン、ジョルジュ・ベルナノス、スフォルツァ⁷、コーエン、フランス・フォーエヴァーの本に言及する僅かなスペースも設けなかったのである。(Charbonneau, 1993, p.20)

1948年2月、シャルボノーは国連のアンリ・ロージェエから手紙を受け取る。「パリはモンレアルやニューヨーク以上ではない」と書いたのは行き過ぎだとたしなめる内容だった。シャルボノーは返信の中で、多少行き過ぎるのはやむを得なかったと釈明する。

私の論敵はいずれも国際的に著名な大作家でした。彼らは、既に認知された文化を代表しています。私は彼らに認めてもらいたかったのです。あまりに忠実なので、彼らが当てにすることに慣れてしまって、もはやその存在さえ見えなくなっている人々がいることに。(Écrits, 1986, p.224)。

シャルボノーは、今回の論争が全く無益だったわけではないと、自負の念も語っている。

ガブリエル・ロワがフェミナ賞を受賞した⁸のも、ロベール・ショケットがアカデミー・ロンサールに入ったのも、ジャン・ブルシェリがアカデミーに迎えられたのも——もともと最後の例は、私が2年来書いてきたことと逆のことを言ったおかげですが——論争が、フランス人たちに私たちの文学に注意を向けさせたからなのです。(Écrits, 1986, p.221)

5. 文学の自律性とアメリカ性

この論争を追っていて感じられるのは、批評家ジル・マルコットも言うように、攻撃を受けて立つシャルボノーの「自信に満ちた口調と内容の乏しさのコントラスト」である (Marcotte, 1986, p.55)。しかし、にもかかわらず、この論争には聴くに値する何かがあり、彼の憤りと、無念さと、開き直りを含んだ屈折した一連の言葉から、その後のフランス系カナダ社会の変化が予感されるのである。彼は、フランス系カナダの文学者は自分のよって立つ場を認識し直さなくてはならないと必死に訴えるのである。

フランス系カナダの作家である我々は、自分たちのアメリカ的意味作用 (notre signification américaine) を見出すべく努めなければならない。我々の歴史家たち、幾人かの政治家たちは、アメリカにおける我々の生活の、摂理とでも言うべき条件 (condition providentielle) を受け入れなくてはならないと理解した。しかし、人々は、歴史家や政治家よりも作家や芸術家によって自分たちの相違、願望、固有の意味作用を自覚するものなのだ。文学が自律性に向かう第1歩は、文化の植民地的な考え方を捨て去ることだ。(Charbonneau, 1993, p.34)

ジル・マルコットは、「アメリカ的意味作用⁹」を語るシャルボノーの卓越した先見性を指摘する。たしかに、旧来のナショナリストたちがイギリス系カナダとの相違を強調し、アメリカ合衆国の「物質文明」に対してフランス・カトリックの精神性を礼賛していたことを考え合わせるなら、リオネル・グルー (Lionel Groulx) が説いたフランスの「偉大な世紀」に背向け「アメリカ」を語るシャルボノーの革新性が際立つ。ジル・マルコットによれば、シャルボノーの「アメリカ」は、概念のレベルよりは、行動や身振りのレベルにおいて追求されている。たとえば、それは言語の所有に関わっている。アメリカ合衆国がイギリスとの従属関係を打ち破ったとき、アメリカ

人は「英語をまるで自分たちだけが話し、自分たちが創造した言語であるかのように見なした」(Charbonneau, 1993, p.57)のである。マルコットは、その後の歴史が彼の炯眼を証明していると言う。

シャルボノーは詩よりも小説が重要だとも力説する。彼に言わせれば、ヘミングウェイ、フォークナー、スタインベックの小説の方が同時代のフランス文学よりすぐれているのである。マルコットによれば、シャルボノーはここで外国からの「影響の多様化の必要性」を説いている。フランス文学の影響を排除することはできないし、そんな試みは愚かだが、複数の国の小説手法を学び、そこから選択しながらカナダの人格に合致した作品を創造すれば、外国文化への従属性から脱却しようと、シャルボノーは考えるのである。

前進するには、フランス人を研究するのを止めずに、今や他の技術、他の作品へと我々の探求を広げなくてはならない。この方法によって我々は我々自身にとどまることがより容易になるだろう。たった一つの影響は模倣に墮する。複数の影響は相互に補完し合い、長い目で見ると、より豊穡なのである。(Charbonneau, 1993, pp.34-35)

たしかによく読んで見ると、シャルボノーが説く自律性は十分な展開に欠けるものの、よく聞かれるタイプの伝統回帰論には還元できない。彼には「回帰する」という発想がないのである。実は、シャルボノーの『フランスと私たち』の冒頭には、ドフトエフスキーがロシアのアレクサンドル皇帝に差し出した手紙が引用されている。手紙の中では、ロシア人は世界の中で固有の意味をもっていることに誇りを持つべきだと具申されている。シャルボノーは、多くのロシア人が模倣に夢中になっている時代にヨーロッパ崇拜からの脱却を説くドフトエフスキーを称賛する。ところが、それを受けた彼のカナダ論になると、シャルボノーは、上の引用に見るように、複数の影響の中での主体的な選択が自分自身であるための一番よい方法なのだと説くのである。ドストエフスキーは模倣とか影響とは言わないのに対して、シャルボノーは、伝統と言わず選択と言う。両者の姿勢には、微妙なずれがある。マルコットは、シャルボノーには関係的思考があると言う。たしかに、シャルボノーは常に何かとの関係の中で思考しているのである。

この時代は、まだ「ケベック」という概念がなかったので、シャルボノーは、フランス系カナダという枠の中にいるが、それを差異性、関係性を軸と

して展開している。マルコットに言わせると、「首尾一貫したカナダの性格」という考え方自体は、既にアルベール・ペルティエ（Albert Pelletier）が1930年代の初めに唱えていたが、シャルボノーの独自性は、それを地方的特徴の細密な描写に求めるのではなく、「差異的、関係的な方法」で捉えようとしているところにある。

普遍主義か、郷土主義かという果てしない論争において、シャルボノーと『ラ・ヌーヴェル・ルレーヴ』はだいたい以前から態度を決めている。郷土主義にしろ、いかなる地方主義にしろ、それには与せず、普遍的なものの側に立ったのである。彼は言う——「自分自身でありつつ、自分の土地、歴史、生活、時代と共に自己を引き受けることによってこそ、作家は普遍的な次元をもった作品を生産できるのだ」。(Marcotte, 1986, p.59)

「カナダ的人格（*personnalité canadienne*）」を地方主義と取り違えてはいけないのである。シャルボノーの「カナダ的人格」は民族誌的な対象でもなければ、本質論的な魂でもない。むしろ、後で触れるエマニュエル・ムーニエ（Emmanuel Mounier）の人格主義に影響を受けた概念なのだろう。上の引用においては、「自分の土地、歴史、生活、時代と共に」とあるが、シャルボノーの「カナダ的人格」は、「土地」のように比較的固定している要素だけでなく、「生活」や「時代」という、むしろ変動するものを含めて引き受ける中で追求される。それは具体的にはフランスやアメリカ合衆国双方からの作用が混在する中で選択することであり、極めて関係論的である。マルコットによれば、まさにここにおいてシャルボノーは豊かな鉱脈を発見しているのである。そして、それは10年ないし15年後にレクサゴン（l'Hexagone）¹⁰の世代の詩人たち、ミシェル・ヴァン・スカンデル（Michel Van Schendel）、モーリス・ボーリュ（Maurice Beaulieu）、イーヴ・プレフォンテーヌ（Yves Préfontaine）らが掘り進むことになる鉱脈である。

マルコットはガストン・ミロンの名前は出していない。しかし、ミロンもシャルボノーから強い影響を受けたようである。ミロン自身がそう言っているのである。ミロンの浩瀚な伝記作者ピエール・ヌヴェー（Pierre Nepveu）が指摘していることだが、ミロンは1974年にエステレル（Estérel）で行った重要な講演の中でシャルボノーの論争に触れている。ヌヴェーはこの講演を聴いているが、ミロンは、この論争が彼の精神変革において決定的な契機とな

り、1953年のレクサゴン設立もシャルボノーのケベック文学自律論から発想を得たと証言しているのである（Nepveu, 2011, p.100）。

6. 戦前のナショナリズムとシャルボノー

シャルボノーの論争の歴史的意義を考える上でもう1つ言及しておきたいことがある。それは、この論争が、文学にとどまるものではなく、フランス系カナダ人の精神史においても1つの転換点になっていることである。シャルボノーの世代、つまり「『ラ・ルレーヴ』の世代」は、リオネル・グルーのナショナリズムに深く刻印されている。彼らの青年期1930年代は、グルーの感化を受けたナショナリズム団体が数多く結成された時期だった。ファシスト的な分離主義者も少なくなかった。その代表的なグループは、ポール・ブシャールなど、1936年に有名な新聞『ラ・ナシオン』を創刊した若者たちである（Noël, 2011, p.86）。シャルボノーも分離主義団体の1つ「青年カナダ（Les Jeune-Canada）」に入会しようと試みている（Noël 2011, p.37）。この団体のメンバーには、後に『ドゥヴワール』紙の主幹になり、2文化調査委員会の報告書を提出するアンドレ・ロランドーがいた。しかし、シャルボノーは1934年にジャック・マリタンに出会い、現代性を追求し、民主的変革を説くカトリック左派の路線を選択するのである。

リオネル・グルーに代表されるような戦前の保守的カトリック・ナショナリズムから戦後の脱宗教的なナショナリズムへの転換は、決して簡単なことではなかったはずである。だからこそ「大いなる暗黒」と呼ばれたデュプレシ政権が長く続いたのだろう。古い世代はファシスト的性格を疑われてもいる。アンリ・ブラサは、戦争中、度々ヴィシー政権支持を公言していたし、リオネル・グルーはより慎重で、もってまわった言い方をしたが、やはりヴィシー政権に好意を抱いていたことは隠しようもなかった。教会は一貫してヴィシー政権側に立ち、ブラサの創刊した『ドゥヴワール』紙もヴィシー政権支持を変えようとはしなかった（Amyot, 1999, pp.172-173）。シャルボノーの世代には、ポール・ブシャールのように戦後もデュプレシ政権を支えるファシストもいた。その中でシャルボノーがカトリック左派路線を貫き、ジャック・マリタンらの出版を通して、カトリック・ナショナリズムに新風を吹き込んだ意義は大きいのである。

一言付け加えておけば、新トマス主義のジャック・マリタンと、人格主義のエマニュエル・ムーニエとの間に親交があったことはよく知られている。

2人には、社会的なものに対する共通理解があったのである。ムーニエが1936年に創刊した『エスプリ』は戦後ケベックで多数の読者を獲得し、ガストン・ミロンやロランドーら「静かな革命」の立役者たちと密接な交流をもち、ケベックの変革を熱心に報道する雑誌となったが、その起点が実はシャルボノーとマリタンの出会いにあったのである。

結論——フランス共和国の一時的消滅と戦後「世界文学」

筆者がロベール・シャルボノーに関心を抱く理由は、彼が「静かな革命」の世代を準備したからだけではない。彼の活動の背景には、戦争によるフランス系カナダとフランスの関係の大きな変動がある。共和国の消滅は、フランス系カナダの作家たちを、フランスという文化的モデルの呪縛から一時的にしる解放したのである。フランスを「喪失した」シャルボノーが「アメリカ」に目を向けたのも頷ける。

世界の心象地理（サイードの用語だが）の混乱は世界各地に生じていた。たとえば、まだフランスの植民地だったカリブ海のマルティニク島では、ヴィシー派ロベール提督の支配下にあったものの、エメ・セゼールが雑誌『トロピック（*Tropiques*）』を創刊し、ブルデュー的な意味でのフランス文学の〈界〉から脱却した新たな文学を構築しはじめていた。ネグリチュードの運動はそのような視点から捉えられる。セゼールもまた、戦後、アラゴンを頂点とする〈界〉と対立するだろう。セネガルのアリウス・ジョップ（Alioune Diop）は1947年に雑誌『プレザンス・アフリケーヌ（*Présence Africaine*）』を創刊、更に同名の出版社を創立している。これは戦後のことになるが、ここにも共和主義的フランスの消滅がもたらした自律運動が見出せるのである。

ナチス・ドイツによる占領とヴィシー政権の時代は、以上のように、パリを精神的首都とする文学〈界〉の崩壊を招き、これが新たなフランス語文学胎動の契機となったのである。戦後の異種混濛的文化の展開と、今日的な意味での「世界文学」の原点の一つを、そこに求めることができないだろうか。そんな観点から、表面的には挫折に見えるシャルボノーの、フランス・レジスタンス派との論争を検討した次第である。今後は、フランス語圏諸地域とのより詳細な比較検討も課題になってくるだろう。

（たちばな ひでひろ 早稲田大学）

注

- 1 フランスでは、エディション・ド・ミニユイのように、レジスタンスに結びついた出版活動があった。
- 2 ベルナノスは、1941年から42年にかけてヴィシー政権批判の記事を『ラ・ヌーヴェル・ルレーヴ』に寄稿している。ベルナノスに限らず、この時期全般については、ヴィノック（2005年）も参照。
- 3 エティエンヌ・ジルソンは、コレージュ・ド・フランス中世哲学史講座の初代の教授。1926年より毎年、モンレアル大学、ハーバード大学などで講義、1929年から大戦開始までトロント大学でも講義した。
- 4 『レ・レットル・フランセーズ』は、レジスタンスのジャック・ドクールとジャン・ポーランによって1941年に創刊された。レイ・アラゴン、フランソワ・モーリアック、レイモン・クノーらも参加。ドクールが逮捕・銃殺され、1942年から1953年までクロード・モルガンが主幹、1953年から1972年までアラゴンがその地位についた。共産党の支配下にあったが、戦後、『レ・レットル・フランセーズ』は最も影響力ある知識人向け刊行物になった。対独協力者の粛清リストを作成した作家国民委員会（C.N.E）とも連動していた。極端な粛清に反対したジャン・ポーランが離脱した後は、その影響力が次第に衰えた。
- 5 シャルル・モースは、1945年1月に終身禁固刑に処せられた。その裁判関係の書がヴァリエテ社から刊行されたことが、アラゴンの匿名記事の直接の理由だったらしい。
- 6 ジャン・カスーは投獄中、書く手段がないので、記憶で33篇のソネットを作詩したことで知られる。
- 7 Carlo Sforza のこと
- 8 周知のように、ガブリエル・ロワは1948年にフェミナ賞を受賞している。
- 9 「アメリカ的意味作用」は「*signification américaine*」の訳。筆者が「意味作用」という、この文脈では余り熟さない訳語を採用したのは、*signification* が運動性・作用を含んだ語だからである。語彙の選択にも、シャルボノーの関係的思考が表れている。
- 10 Les Éditions de l'Hexagone は、1953年にオリヴィエ・マルシャンの詩27篇、ガストン・ミロンを17篇収録した詩集『2つの血』を出版することで発足した。他に Jean-Claude Rinfret, Louis Portugais, Mathilde Ganzini, Gilles Carle を加えた6人が創設メンバー。法的に出版社としての形態を整えたのは、1956年。

参考文献

- Amyot, Éric (1999) *Québec entre Pétain et de Gaulle – Vichy, la France libre et les Canadiens français 1940-1945*, Fides.
- Beaulieu, Paul (1987) « Robert Charbonneau, la France : esquisse d'un portrait », in *Écrits du Canada français, numéro spécial, « Robert Charbonneau parmi nous »*, no.57, pp.7-22.
- Charbonneau, Robert (1993) *La France et nous – Journal d'une querelle*- Bibliothèque Nationale du Québec (1^{ère} édition, L'Arbre, 1947) .
[Écrits, 1986], *Écrits du Canada français, numéro spécial, « Robert Charbonneau parmi nous »*, no.57.
- Marcotte, Gilles (1986) « Robert Charbonneau, la France, René Garneau et nous... », in *Écrits du Canada français, numéro spécial, « Robert Charbonneau parmi nous »*, no.57, pp.39-63.
- Michon, Jacques (1991) « Présentation » pp.9-13, « Les Éditions de l'Arbre (1941-1948) » pp.13-42 et « Appendice : Catalogue des Éditions de l'Arbre » pp.185-227, in Michon, Jacques (dir.) *Éditeurs transatlantiques : études sur les Éditions de l'Arbre*, Lucien Parizeau, Fernand Pilon, Serge Brousseau, Maugin, B-D. Simpson, Sherbrook, Éditions Ex-Libris.
- (2009) *Les Éditeurs québécois et l'effort de guerre(1940-1948)*, Les Presses de l'Université Laval et BANQ.
- Morelle, Chantal (1995) « Les années d'exil », in *Cahiers pour l'histoire de la recherche*, CNRS Éditions.
- Nardout-Lafarge, Élisabeth (1993) « Histoire d'une querelle », in Charbonneau, Robert, *La France et nous – Journal d'une querelle — 1940-1950*, Bibliothèque Nationale du Québec (1^{ère} édition, L'Arbre, 1947).
- Noël, Mathieu (2011) *Lionel Groulx et le réseau indépendantiste des années 1930*, vlb éditeur.
- Nepveu, Pierre (2011) *Gaston Miron — La vie d'un homme biographie*, Les Éditions du Boréal.
- ヴェイノック、ミシエル (2007) 『知識人の時代—パレス/ジッド/サルトル』 塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳、紀伊國屋書店。
- ワテース、ナタリー (2013) 「ケベック詩の誕生」 小倉和子訳、立教大学異文化コミュニケーション学部紀要『ことば・文化・コミュニケーション』第5号、99-112 頁。